蘇芳集

蛍草

高橋さえ子

風やんで歩き出さんか帚草

山水の音なく暮るる秋彼岸

湯疲れか遠稲妻にやられしか

髪形変へよと風船かづらかな

点眼や未明紫式部の実

樟の樹の影あをあをと御命講

快復をゆつくり待たむ蛍草

こゑ出すと

青山丈

柊の花夕映えの少しあり

てつぺんの銀杏の散る日ありにけり

こゑ出すと綿虫一つ離れけり

朝昼のあとは夕方枇杷の花

幾つもの葉牡丹を見た目で歩く

綿虫とヘリコプターと昼になる

肉焼いて煙を上げて年詰まる

綿虫

野路斉子

銀杏散る風に逆らふ勇気もて
綿虫も我もびつくり顔同士
欲しきもの籠に綿虫飼ひあるを
誰よりも大きな落葉欲しと駆け
雨降ると落葉が降ると人は傘
首振つて答は出ない枯さ中
幾つかは猫語も解し日向ぼこ

波裏

前田陶代子

赤樫の天指す勢ひ山廬の忌
合流の水に水の香雁渡し
水門に水鳴る鳥の渡るころ
ことごとく波裏暗し雁来紅
岸を打つ波音秋のころもがへ
故郷を遥かに秋雲の色かたち
深秋の畳にひろふ貝釦

鶴の来るころ

宮尾直美

あふれくる海の光や女郎花
絵硝子も猫も染まりぬ秋夕焼
誰も継がぬ仕事に生きて秋燈
彼の人は如何に在すや樗の実
一本のやがて百本曼珠沙華
夕映えてそろそろ鶴の来るころか
本堂の燭のさゆらぐ十三夜

葛嵐

八木下末黒

とりあへず卓に歳時記秋扇
ジーンズのごわごわ乾く昼の虫
葛嵐過ぎし鉄路の葛の蔓
秋海棠一枝を浮かべ手水鉢
秋の日のほのぼの届く文机
白萩の盛りの枝の揺れにけり
仲秋や糸瓜の棚の花ひとつ

相州江ノ島

吉田幸敏

秋高し島を繋ぐに橋ひとつ
島裏の生活の径や秋簾
澄む秋の巫女恪勤のスニーカー
菊黄花あり切岸の浦の墓地
捨て墓を抜けて人の世落葉掻く
海たひらか浦浦の秋つらねては
揚げ小舟磯菊はまだ濡れてゐる

ハンドクリーム

小川美知子

ふり仰ぎ見る印影のやうな月
秋晴や淋しい鴉もゐるらしく
よく晴れてよく暮れてゆく柿もみぢ
句会とは誰かに会へる樗の実
身支度をして秋風の中通る
ほどほどに着て出る桜もみぢかな
新しいハンドクリーム冬が来る

枇杷の花

金田きみ子

立冬やいつもの位置に卓と椅子
一人住むことの安穏枇杷の花
灯を消せば仏壇匂ふ初しぐれ
銀杏黄に齢相応と言ふことば
音なくば寂しさ育つ冬灯
灯点せば亡き夫居りぬ白障子
もう少し生きたし蒲団日に当てる

鳥の翔ち

木内憲子

冬めきぬ水辺を鳥の翔ちてより
一穢なし十日の菊と思へども
はつ冬の虚空へ息をほうと吐く
冬の坂めきて日向へ下りてゆく
読みかへす一書のごとく帰り花
うすうすと人が匂へる冬日向
かまつかの赤きに刻を逝かしけり